

江北の四季

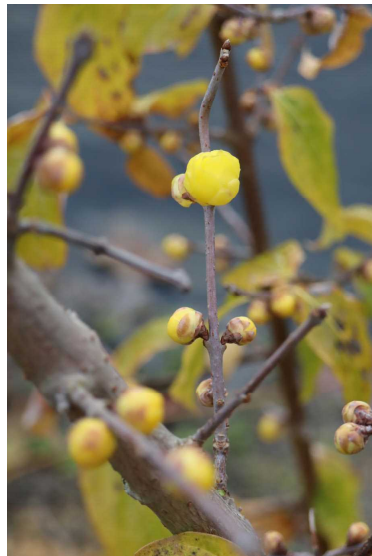
令和2年
12月23日
第39号

○冬至。第六十六候、末候、雪下出麦(ゆきわたりてむぎのびる せっかむぎをいだす)。



一面、麦を覆っていた雪が融け出しました。

秋に蒔かれた麦の種は雪が降る前に芽を出し、霜や雪に耐えて年を越し、6月頃、麦の秋を迎えます。この時期の農作業として、麦踏みがあります。春までに三〜四回するようですが、こうすることにより、①霜柱による根の浮き上がりを防ぐ、②伸びすぎを押さえ倒伏を防ぐ、③分けつを促進し穂数を増やす、などの効果があるようです。麦踏みは初春の季語となっていますが、人がカニの横ばいのように踏みつける農作業は、今日ではトラクター(ローラー)が機械的に踏みつけて行くだけです。踏まれれば踏まれるほど立派に育つ麦は、よく人生に例えられます。



ロウバイ

○ロウバイ(蠟梅 臘梅)

ロウバイは漢字では蠟梅あるいは臘梅と書き、ウメと同じように他の花に先駆けて甘い香りの花を咲かせます。花の形もウメに似ていますが、ウメがバラ目バラ科に対してロウバイはクスノキ目ロウバイ科です。蠟の字は

花の色や光沢が蜜蠟みつろうを連想させるから、臘の字は、臘月(陰暦の十二月)に花が咲くから。雪中四友(せつちゅうのしゅう)と呼ばれる花のひとつです。雪中四友とは、文人画に好まれた画題で、蠟梅、梅、山茶花さざんか、水仙を指します。なお、正月などの祝いの席に生ける、松、竹、梅は歳寒三友(さいかんさんゆう)と呼ばれます。梅は人気者です。

臘梅や 雪うち透す 枝のたけ

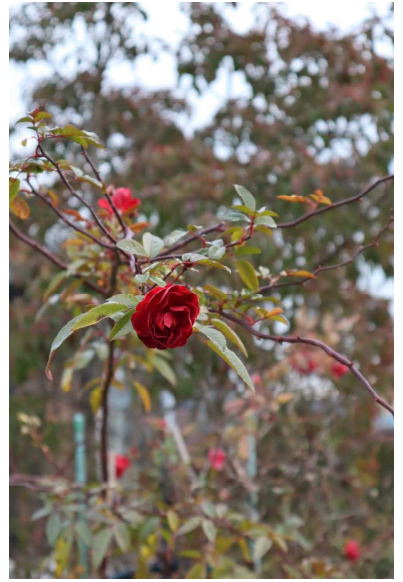
臘梅や 枝まばらなる 時雨ぞら



サザンカ(山茶花)



スイセン(水仙)



冬薔薇(フユバラ フユソウビ)

☆冬薔薇は冬の季語。四季咲きの薔薇は色が深まり、冬になって北風に吹かれても、けなげに咲いています。俳句では冬薔薇をフユソウビともよびます。

○大みそか 定めなき世の 定めかな

井原西鶴

いよいよ今年もあとわずかとなりました。この時期になると必ずこの句が思い浮かびます。西鶴は、江戸は元禄時代の人で浮世草子とよばれる小説を書き、庶民の生活を生き生きと描いています。江戸時代の買物物は現金払いでなくツケ払いですから、定めなき世とはいえず借金取りだけは、特に大晦日は世の定めとして必ずやってきました。貧乏長屋のはつつあん、熊さんは大変です。この句はそんな世情を詠んでいるのですが、そのまま、

大晦日は定めなき世の一年の区切り、と受け取るほうが自然です。

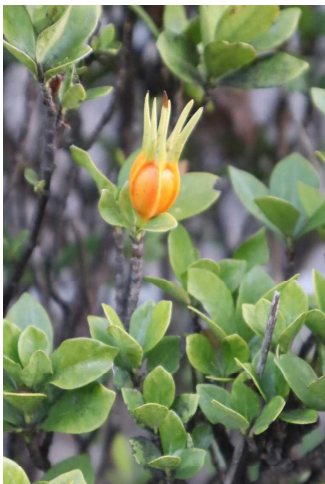
地軸が公転面に対して傾いているお陰で、太陽の周りを一回公転している間に日照時間の変化があり四季が生じます。その四季の変化から一年を感じ、その区切りが大晦日です。無常の世のときの移ろいを大晦日でいったん区切り、西暦〇年とか令和〇年と年を積み重ねることが出来ます。人は大晦日にこの一年を振り返り、来年こそはと思い新年を迎えます。

浮世の月見過ごしにけり末二年すえ

井原西鶴 辞世の句

人の寿命は五十年というのに、(あまりにも楽しく)余分に二年も生きて、この世をみてきたなあ。

現代では数え五十二歳ではとてもこの境地にはなれません。年越しそばで、今年一年の災厄を断ち切り、来年の無病息災、長寿を願いたい。



クチナシ(柂)の実
黄色の植物染料として
使われます。

お正月

東くめ作詞

滝廉太郎作曲

♪もういくつねると お正月
お正月には 凧たこあげて
こまをまわして 遊びましょう
はやく来い来い お正月♪

♪もういくつねると お正月
お正月には まりついて
おいばねついて 遊びましょう
はやく来い来い お正月♪

○除夜の鐘

鐘の数は108。これは仏教では煩惱の数といい、俗説では四苦八苦で 4×9+8×9=108といいますが、この欄では、一年12ヶ月と、24節氣、そして72候の合計の説をとりたいです。コロナ禍ではありますが、四季の移ろいを味わい楽しみましょう。来年もよろしく願っています。皆様、いい年をお迎えください。



チーゼル 別名はラシヤカキソウ(羅紗搔刺き草)。織物をこの毛羽立たせたそうです。

